

若手研究者としての第一歩 —第2回 大学院における研究と気づき—

第2回は、大学院における研究に何が重要であるかについて、一院生の立場からお話しできればと思います。現在博士後期課程1年に在籍しておりますので、大学院での生活といえどわずか3年間の出来事に過ぎませんが、私自身の経験から2つの観点を設けました。

① 研究は一人では進められない

この点は卒業論文の執筆に際したインタビュー調査を通じ、学部時代に一部は自覚的な点であったかと思えます。指導教員をはじめとする先生方の存在は大前提であるので言及致しませんが、ここで一部と表現した理由としては、当時は研究に登場する直接的な調査協力者という認識に留まっていたためです。無論、こうして調査に協力してくださる親切な方々なしでは研究は成立しませんし、修士論文の執筆に際してドイツへ調査に出向いた際も、見知らぬ日本人を受け入れていただいたことへの感謝は尽きません。このドイツ調査での経験についての詳細は、第3回のコラムに譲ることとします。

学部時代の認識に加え、大学院での研究活動を通じて自覚的になったのは、同じ研究室あるいは研究科の院生のみならず、大学院外部にコミュニティを構築していくことの重要性です。例えば、その一つが学会大会への参加であるといえます。私自身は初めての大会参加は本学会の第40回大会（早稲田大学）で、初めての学会発表もその1年後の第41回大会（長崎大学）であったように、いずれも大学院進学後のことでした。（学部時代にはつくば市で開催されたIAEVG大会に運営ボランティアとして携わりましたが、当時は学部2年生であったことや、運営がメインであったため、実際に発表を聴講する機会もほとんどありませんでした。いまになってみれば、本当にもったいない関わり方であったと思えます。）

学会発表が、自身の研究を昇華させる機会となったことは言うまでもありませんが、その参加により、新たに様々な考え方を知ることとなり、時として自身の関心と極めて類似した研究に巡り合う機会にもなりました。さらには、その場でのコミュニケーションに留まらず、以降も交流を持たせていただくことがあり、現在の研究活動にもつながっています。

大学院進学後は、こうした学会大会以外でも外部研究会に参加させていただくことになりました。そもそもこうした研究会に参加できたのも「人とのつながり」のおかげであった

ことは間違いありません。現在でもなお継続的に参加させていただいている研究会は二つありますが、一つは大学院の先輩にもあたる先生から、もう一つは同じくドイツの教育を研究する大学院の先輩からご紹介をいただきました。どこの馬の骨かもわからないような一院生に声を掛け、こうした未知なる外部世界へと誘っていただいたことへの感謝は尽きません。もちろん、そこで関わりを持たせていただいた先生方に対しても同様です。

こうした機会を通じてご指導をいただいた経験や、そこで得た見識は直接的に修士論文へとつながっていくものでしたし、研究者の先輩方との出会いがなければ現在の研究にたどり着いていないことは明白です。コミュニティを拡大し、新たな発見に貪欲になることは修士段階において不可欠なプロセスであるように思います。ひいてはそうした未知なる世界に飛び込んでみる勇気と行動力が求められるののかもしれません。

② 「やりたいこと」と「やらなければならないこと」

2点目は短くなりますが、研究目的・対象の設定に関わる部分です。卒業論文を振り返ってみると、そこには「やりたいこと」あるいは「やりたい気持ち」が存分に広がっていました。大変お恥ずかしい話ですが、当時は「瀬戸市のキャリア教育は良い実践なんです、知ってください！」という気持ちのみに、ただ突き動かされていたように思います。

無論、こうして自身の関心を根本に置くことは、研究のモチベーション維持や主張の軸として重要性を持つ一方で、修士論文以降はこの「やりたい気持ち」だけでは通用しなくなることを実感しました。卒業論文においても、その研究意義は求められていましたが、それ以上に明確な貢献を示す必要があることへの気づきは、大学院入学直後の大きな変化であったといえます。第1回のコラムでもお話ししましたように、現状、こうした点の明示は苦勞している部分でもあります。自身の研究の意義を常に検討し、「やらなければならないこと」に取り組むという研究者としての使命を自覚する必要があるのだと感じます。

以上、第2回は大学院での研究に関しての気づきをテーマに進めて参りました。ただ、博士後期課程については1年を終えたに過ぎませんし、院生の先輩方には「いやいや、それよりもっと大事なことがあるんだよ」とお叱りを受けてしまいそうですが、大学院生活のおよそ折り返し地点から見えた景色として受け取っていただければ幸いです。

(筑波大学大学院 藤田駿介)